

障がい者と人権

自立を支援する

ノーマライゼイション、バリアフリー、ユニバーサルデザインなどの考えが広まり、障がい者、また、健常者にとって住みやすい環境がととのいつつあります。

しかし、目の不自由な人を後ろから蹴る行為や「白杖」を折る行為、けがをさせる事件などもあり、障がいのある人たちが安心して暮らせる社会にはなっていない。

また、知的障がいがある子どもがいる親からは「この子の将来が心配だ。自分で稼いで自立することができたらどうか。」との声も聞かれます。

読売新聞「わが社の人財」コーナーに会社会長の大山泰弘さんの話が掲載されていましたので紹介します。

大山さんが障がいがあ

る人を雇用するかどうか迷っていた時に禅寺のお坊さんに相談すると「人間の究極の幸せとは、人に愛されること、ほめられること、役に立つこと、必要とされることの四つ。このうちあとの三つは会社で働くことを通じて叶えられる幸せ。福祉施設では味わえませんよ」との返答でした。大山さんが障がい者を積極的に雇用するようになったのはそれ以降のことでした。「人間の幸せは人に必要とされて働き、自分で稼いで自立すること。そういう場を提供することが自分のできることはないか」と考えられたようです。

それで二週間の就業体験の受入を決断されました。就業体験での作業は簡単なラベル貼りだったので、時間も忘れて幸せそうに、一生懸命仕事する姿に感動したのは健常者の社員でした。

今、その会社の従業員

の7割以上が障がいがある人であり、業績を上げています。

特別支援学校・学級には、通常の学校・学級にはない「自立活動」が教育課程の中に組み込まれています。それだけ「自立する・自立できる」ということを重要視しています。

私たちは、自立をしたことがんばろうとしている人の自立心を阻害していかないか、阻害しようとしていないか、今一度、家庭、地域、社会の人権意識を見直す必要があります。

2014(平成26)年度
小松島市人権標語
入選作品(その3)
気をつけて
はじめと冗談
紙一重

市人権推進課(教育庁舎1階)
TEL 32・2122
FAX 33・3525
Mail: jinkensushin@city.komatsushima.tokushima.jp

市民文芸 花みずき歌壇(308) 松並敦子・選

卒業の歌聞こえきて道端の看板だけとなりし文具店

中郷町 東野 典子

《評》学校から聞こえてくる卒業歌は、教師であった作者には特別感かんが深いものがあつたに違ない。今は「仰げば尊し」「蛍の光」とは限らないが、きつとそうだったのだろう。そして学校の近くに必ずあつた文具店は跡形あとがたもなく、看板だけがぼつんと立っている。少子化で変わりゆく学校に今昔こんじやくの感を禁じ得ない。

百グラム千円の茶を買いわが療養に茶の香を添える

ひのみね総合療育センター 関 政明

立春というこえ聞けばおもむろに心ほぐれて目白とあそぶ

田浦町 西 照子

ホカホカカイ口腰にべたべた貼り付けて老いても農は畦あぜの草焼く

赤石町 田原トシ子

今日よりは四季の始まり春の立つ同行二人白衣の姿も

立江町 濱 耕一

買物の釣り銭溜まりお財布は重くなりゆく五円十円

横須町 柿本美知子

遠き日の雪の鉤路を思いおり窓に降り積む雪の白さよ

横須町 福島 夢栄

わが畑の大根までもわれに似て太く短くしかし美味しい

田浦町 太田カツミ

たたくより鳴ってもらうとドラマーはドラムを語る打ち鳴らしつつ

横須町 山崎 泰子

凍しもみる朝エイツと気合で布団蹴りわれを鼓舞こぶたして今日を踏み出す

神田瀬町 大西カヲル